

垂井町岩手漆原の北村素軒の碑



翁名素軒字三秀幼字段八郎號壽堂後刻髮稱素翁北村常細第三
子也文政五年十月廿二日生於濃羽羽村年十六出仕竹中候廩
進表江戶翁少時不喜讀書日事寫畫父兄親之不悛及壯深悔之乃
求師友研鑽經史化不倦文文元年歲四十以先母疾歸養母歿而
不復宦僕游自適常寓近鄉娶子身教授翁為人應慈寡欲不計財賄
有無終生不娶獨居晏如曾入米庵南嶺之門學書畫晚年寓竟筆墨
居常對机作字滿紙而止故筆力遒勁雖以書願家者莫能及也
明治十八年始還家而講學不少休取費者常滿門明治三十五年
月廿日以病卒享壽八十一

晚學匪懈
易怪筆名

諄々育英

杜門謝世

清淡畢生

如此之人

銘曰

翁の名は素軒、あぎなを三秀、幼名を段八郎と言う。雅号を寿豈と称し、後に剃髪して素翁と称した。北村常綱の三男として、文政五年（一八二三年）十月二十二日、濃州岩手村に於いて生れる。十六歳で旗本竹中家へ出仕、しばしば江戸と岩手を行き来した。

少年時代には、読書を嫌い、毎日絵を描いていた。父兄はこれを戒めたが改めることはなかった。三十歳のころ、これを深く悔やんだ。そのため学問の先生や友達と一緒に、中国の経書や歴史書を研鑽することに集中して飽きることはなかった。

文久元年（一八六一年）、四十歳の時に、老母が患ったため岩手に帰って看病した。

老母が亡くなったけれども、復職せずに悠悠自適、近郷に仮住まいを設け、子弟を集めて教えていた。素軒の人となりは、慎み深く、財産の有無を気にせず、一生涯妻を娶らず、一人で安らかに過ごす人であった。

若いころ市河米庵、鈴木南嶺の門下として絵を学んだ。晩年は筆墨に勤しみ常に机におかたて書の鍛錬をしていた。一日に必ず千文字以上を書いてきた。そのため、筆の運びが力強く、書をもって優れていると言われる人でも追随することはできなかった。

明治十八年の初めに家に帰って学問の研究に没頭する。贈り物を持ってくる人は門前に溢れかえっていた。

明治三十五年九月四日病氣により亡くなった。享年八十一歳 故人を讃えて言うならば年をとつても学問を怠らず、懇切丁寧に教え、家以外で教えないことを謝るなど、清く爽やかな一生涯であった、このような人に名声を与えることを疑問に思つてはならない

北村素軒碑文

翁名素軒字三秀幼字段八郎號壽豈後剃髮稱素翁北村常綱第三子也文政五年十月廿二日生於濃州岩手村年十六出仕竹中公屢往來江戶翁少時不喜讀書日事寫画父兄規之不悛及壯深悔之乃求師友研鑽經史仡仡不倦文久元年歲四十以老母疾歸養母歿而不復官優游自適常寓近鄉聚子弟教授翁為人愿慤寡欲不計財賄有無終生不娶独居晏如曾入米庵南嶺之門學書画晚年寓意筆墨居常对机作字日必滿千而止故筆力遒勁雖以書顓家者莫能及也明治十八年始還家而講學不少休取贄者常滿門明治三十五年九月四日以病卒享壽八十一銘曰

晚學匪懈 諄々育英 杜門謝世 清淡畢生 如此之人

曷怪垂名

北村素軒 (漢学者・書家) 略歴

文政5年（1822年）10月22日 漆原に誕生

天保9年（1838年）頃、旗本竹中家に出仕する

江戸と岩手を行き来した

この間に市川米庵に書を学び、鈴木南嶺に画を学ぶ

文久元年（1861年）母親が患ったため旗本竹中家を辞し

漆原に帰り看病に専念する

文久3年に母親が亡くなくても竹中家には復職せず、

近郷に塾を開いて子弟に経史と書を教えた

門人に大石の橘 幽景、牧田の徳山界雄らがいる

赤報隊に参加し、明治元年に信州坂本宿で戦死した

北村与六郎は素軒の長兄の子で、甥である

明治6年（1873年）集学義校（府中小学校）の初代校長に

就任。2年間務める

明治18年（1885年）漆原に帰り学問の研究に励む

明治35年（1902年）9月4日没す（享年81歳）

岩手小学校百年史に掲載されている北村素軒の両親の墓碑
素軒の書（筆跡）と思われる





家長父十郎常徳之父
 天保十二辛酉八月十六日
 圓北邨如八十六葬泉岳寺
 父久三癸亥歳九月八日
 先俗名於隆八十一歳

素軒常勝書

素軒常勝書とある

北村素軒の両親の墓碑の表面（漆原北村家の墓所）

圓翁淨覺常綱居士

光譽智貞妙隱信女

北村素軒の両親の墓碑の裏面（漆原北村家の墓所）

高木廣居

家長文十郎常德之父母

天保十二年**辛歲**八月十六日

圓 北邨如入六十六葬泉岳寺

文久三癸亥歲九月八日

光 俗名 於隆 八十一壽

素軒常勝書

※**注**

天保十二年は**辛丑**